宮島門前町東町の街区形成過程 と敷地割に関する一考察

THE FORMATION PROCESS OF “SUBDIVISION AND PLOTTING” OF EAST SHRINE TOWN IN MIYAJIMA ISLAND

駒井達也 ——— * 1 森保洋之 ——— * 2

Tatsuya KOMAI ——— * 1 Hiroshi MORIYASU — * 2

キーワード：
世界遺産宮島、門前町、街区形成、敷地割、京都

Keywords:
World heritage Miyajima Island, Shrine town, Subdivision, Plotting, Kyoto

This paper mainly clarifies subdivision of the east shrine town in Miyajima. The acquired knowledge is shown below. Miyajima's town composition was converted to a row-shaped configuration of the composition centering on a street parallel to the coastline from the composition centering on an alley. Miyajima formed a neighborhood association and disaster prevention space in the residence area. In Miyajima, the town area is intentionally formed based on marine reclamation.

1. 研究背景・目的

世界遺産宮島は、弥山自体を神体とする聖地とされており、厳島神社が 594 年に創建され、神職等が一時的に居住を許されたものの、一般人はほとんど居住していなかった。しかし 1168 年に神社が改修増築されて以降、神社に関わる職工人等も居住を始め、14 世紀頃には神社への参詣が盛んになり、瀬戸内海交通の要衝、また庶民信仰の地として現世利益的性格も帯び始め、各地から商人が集まり門前町(社家町・商家町)が沿岸部に形成された(図 1)。商家町の門前町東町は、中世末山手の寺社境内を核とする小規模な門前集落として形成され、家屋は飲用水確保のため谷間の川沿いに建設された。江戸期に入ると、港の建設と商工業発展のため海を埋立て居住域が拡大された^{注1)}。人口増加に伴い大正期までに埋立てが 3 回繰り返され、海岸線へ平行する道筋を主軸に両側へ家屋が建ち並ぶ現在の構成となった(図 2)。居住街区は短冊状に敷地割され、伝統家屋は通り庭や中庭を持つ切妻平入りの町家特有の空間構成で(図 3)、瀬戸内海島嶼域における海岸の埋立てによる厳島神社門前町の形成という固有の歴史・空間的特徴を有す。

しかし、宮島に関する既往研究は厳島神社研究が主で、神社の造営年代に着目した研究等の歴史的研究や、平面配置図、立面図を基にした神社の設計手法に関する研究、海上木造建築としての神社の建築的特異性に着目した研究等の建築・意匠的研究がなされている一方、宮島の集落に着目した研究には、寺社を中心とした門前町形成に関する研究¹⁾や、古民家の環境特性に着目した研究²⁾、みず・みち・いえ等の空間構成の基本に焦点を当てた研究³⁾の他、町並の景観と保全に関する研究⁴⁾等はあるが、門前町の形成過程に関し街区形成を中心に考察した研究はみられない。

そこで本論では宮島門前町東町(以下東町と称す)の 8 街区(図 2)を対象に^{注2)}「みち」と「いえ」の関係に着目し、宮島の古絵図と現在の地図との比較、住宅地図を基にした町家の間口奥行の計測等により、造成による街区形成過程と裏路地・町内会組織等の生活・

図 1 宮島の東町と西町

図 2 東町の概要

¹⁾ 山口大学大学院理工学研究科 大学院生
(前広島工業大学環境学部 学部生)
(〒755-8611 宇部市常盤台 2-16-1)
²⁾ 広島工業大学環境学部 教授・工博

¹⁾ Graduate Student, Graduate School of Science and Eng., Yamaguchi Univ.
(Former Undergraduate Student, Faculty of Environmental Studies, Hiroshima Institute of Technology)
²⁾ Prof. Faculty of Environmental Studies, Hiroshima Institute of Technology, Dr. Eng.

図3 東町の町家

図4 現在の東町の地図と絵図との合成

防災機能の特徴を示すとともに、京都との比較により東町の街区構成の固有性に関し考察を加える^{注3)}。調査方法は、地図を用いたまち形成の分析、文献調査、現地踏査、インタビュー調査等である。

尚、本論文は参考文献5)を基に改めてまとめ直したものである。

2. 街区の形成過程

東町のみちは、まずは中世末に谷あいから海に向かって流れる川に沿い小路が形成されたものと推定される。当時の東町は、山と平地の境界部を中心に小規模な集落を形成していたが、江戸期の造成^{注1)}の度に、通りが海岸線と平行に整備され浜手に開かれ、小路も延長されることで、小路と通りに囲まれた範囲が街区として成立したのと考えられる。

さらに、東町のまちの形成過程と敷地割の変遷を明らかにするため、大願寺絵図(17世紀初期～末期)と吉田家絵図(1783年)とを現在の東町の白地図に合成した(図4)^{注4)}。これらの絵図は、当時の宮島全島のまちの様相が描かれた絵図であり、町家の建ち並びや、戸別地図のように、建物一軒ずつに名称や屋号を表示し、描かれている絵図である。大願寺絵図には、造成ライン①(図2参照)までのまちの様相が描かれており、吉田家絵図には、造成ライン②(図2参照)までのまちの様相が描かれている。この図から東町の街区形成過程

図5 東町の街区形成の変遷

図6 京都と東町の街区構成の比較

を考察したのが図5である。合成結果を見ると、小路の両側に敷地割がなされ、町家が建つことがわかり、その後の造成により通りができる度に、通りに面して敷地割がなされている。街区端部の形態をみると、小路に間口を向けた町家よりも通りに間口を向けた町家が優先的に建てられている形態が多く、通りを主体として山部から海側に向かって列状にまちを形成してきたことがわかる。境界部のような、山の谷間に比較的早く発生した地区は、当初漁村の様相を示し^{注5)}、小路に間口を向けた小路中心のまちを形成していたと想定され、その後、造成により通りが形成され、通りに間口を向けた通り中心のまちに構成が変化したものと推定される。

ここで宮島の固有性を述べるために、町家の平面形態が東町と類似し、かつ計画的なまち形成を行ってきた、一般的なまちの例として、京都のまちと東町との相違点を述べる。比較対象地は現在の京都市中心部である。平安京では条坊制に倣い、みちを基盤目状に設定、さらにその囲まれた範囲を16町に分割し、それぞれを街区としている。街区内の町家の建ち方は、平安京の当初計画では、町家が東西にのみ間口を向け、建ち並ぶ形式であったが、みちが平安京の生活の中心になるにつれ、東西南北に町家が建ち並ぶ形式となった。16世紀後期になると、街区中央にみちを設け、その両側にも町家が建ち並ぶようになる(図6)。これに対し東町は、南北側に間口

注1) 内方位に関して、ここでは便宜上、(南側)、(北側)と表現する。
注2) 図中の7つの範囲が、計測対象範囲

図7 東町の通りに面する建物と魚之棚町、桜町

図9 宮島東町の建物の間口と奥行

図8 東町の通り別、敷地・奥行平均と裏路地の概要

を向けて建つ町家は少なく、街区端部も通り型が多いことから、主に町家が東西方向にのみ間口を向けて建ち並ぶ形式である。これは、あらかじめ間口方向を決めて町家を建ち並べる京都と違い、造成の度に変更される海岸線に、順次間口を対応させて町家を建ち並べているため、このような形式になったと考えられる。

3. 街区内の敷地割と建物寸法

東町の通りに面する敷地と建物の寸法を各通り別に比較する。通り別とは、図7の通りA(南側)～通りC(南側)別を指す^{注6,7)}。方法は、地籍図と住宅地図の間口と奥行の寸法を計測し、平均を求めて比較するが、間口に関しては、両計測地図の年代が違い、隣接する敷地との統合や細分化等により、敷地の大きさが変化しているため、対応関係が難しくなっている。そのため奥行のみ取り上げ、図8により比較する。

通りA(南側)・C(南側)では、敷地と建物の奥行の差が0.6m程度以下で、敷地と建物の間にほとんど空間は無かった。通りA(北側)・B(南側)・B(北側)では、敷地と建物の奥行の差がそれぞれ1.9m、3m、4.7mあり、特にB(北側)の敷地と建物の間に空間のあることがわかる。これは、かつて造成前に通りB(北側)の建物の裏にあった海岸線が造成後、その名残として通りB(北側)と通りC(南側)の

表1 宮島東町と京都の建物の間口・奥行の比較

パターン ^{注1)}	宮島・東町				京都			
	通り別			全体平均	通り別			全体平均
	1	2	3		a	b	c	
全計測数(建物数)	22	124	18	164	242	62	77	381
間口平均(m)	5.4	6.4	6.2	6.0	5.7	5.6	7.0	6.1
奥行き平均(m)	19.1	22.9	12.6	18.2	15.7	19.3	15.2	16.7
面積平均(m ²)	102.0	147.2	77.9	108.9	89.9	107.4	106.7	101.3

注1) パターンは間口と奥行の大きさが類似した計測対象範囲を集めたものであり、宮島・東町のパターン1-3とは、図9凡例に示すもの、京都のパターンa-cとは、本文注釈8)に示すものことである。結果として、宮島・東町では、通り別、京都では、街区別にパターンの相違がみられた。

建物間に4.7mほどの空間を存在させた可能性を示す。通りB(北側)・C(南側)の建物は災害時の避難路が正面の通りしかないことから、この空間は裏路地と呼べるもので、生活・避難通路的役割を果たしていたものと推測される。

東町の通りに面す建物と小路中心のまち形成をしていた魚之棚町・桜町の小路に面す建物^{注6)}の間口と奥行の関係を図9、表1に示す。通りに面す建物の間口は6m、奥行きは20m程度であるが、魚之棚町・桜町は間口6.2m、奥行12.6mである。両者を比較すると、間口に大差はないが、奥行は通りに面す建物の方が長い。つまり東町は、初期の小路に間口を向けたまち構成から、造成により海岸線と平行に通りが設けられ、通りに間口を向けたまち構成に変化した際、町家の形もより奥行きの長い短冊状に変化したことがわかる。

比較対象として京都の天正の地割が行われた場所の中から比較的町家が多く残る範囲を選定^{注7)}し、建物の間口と奥行を計測した。京都は間口が5m後半～7m程度で東町と近い。奥行は15m～19m程度で、東町の通りに面す建物の方が細長い建物形態である(表1)^{注8)}。また、京都の東西方向の街区幅は、計測した8街区を平均すると60m程度で、建物の奥行は街区幅の1/4～1/3程度の長さであり、街区中央には建物や空き空間が存在している。

4. 街区構成と裏路地・共同井戸・町内会組織

4.1 裏路地と共同井戸

現在はほとんど残っていないが、古老へのインタビュー、共同井戸の位置、敷地と建物間の隙間空間、町家の裏木戸の残存状況等から、東町には「裏路地」と呼べる空間が存在したと推察される。裏路地は家の裏庭同士を繋げた民有地であり、仕切りや壁等を設けず、相互の敷地に行き来できるようにすることで、路地的空間が形成されたものである。

この裏路地には3タイプが存在する(図11)。第一は、山・崖と建物の間に形成されたものである。I邸(邸宅位置を図10に示す)付近では、南側の崖沿いに隣家の敷地を行き来できる空間があったと、付近の住民から聴取できた。さらにこの空間は、誓真釣井(江戸時代に住民から寄付を集め設けられた共同井戸)まで繋がっていたことが聴取から確認された。

第二は、建物裏に位置する海岸線に沿って形成されたものである。これは、古絵図や古老へのインタビューにより、かつて家の裏庭から釣りができたという話や、裏庭に船が泊っていたという話が聴取でき、図4(b)の1783年頃の海岸線沿いは、建物裏部分の敷地を共有し往来可能な通路の機能を担っていたと推定される。

第三は、街区6-8の中央に海岸線と並行に形成されたものである。図10の旧S邸では共同井戸を使用するため相互の敷地を行き来していたことや、T邸には木戸が設けられ、隣家の敷地を行き来していたことが、町家の復元図^{7,8)}や付近の住民聴取から判断でき、井戸も街区中央に配置されているものが多いことから推定可能なものといえる(図11)。

この裏路地は、共同井戸使用のための通路、隣家間交流の場、火災時の避難路として利用されたものと考えられる^{注9)}。

4.2 町内会組織

図10に東町の町内会の形成範囲を示す。町内会組織は大枠として、古くから現在と同様であることが見聞されている。町内会は街路を挟んで組まれ⁹⁾、主に、小路を挟んで両側に町家を構える町と、通りを挟んで両側に町家を構える町の2タイプが存在する。前者は主に山側にみられるもので、東町の中でも発生が早い魚之棚町・桜町等谷あいの町が主である。このことから、集落発生当初、小路を中心として集落形成をしていた名残が、この町区区分に表れていると考えられる。後者は造成ライン等を区切りとして範囲が決められ、町区区分は造成の影響を受けており、この町内会の構成は京都の「両側町」と類似している。このことから、小路を意識したまち構成から、通りを意識したまち構成に展開したことがわかる。

5. 結論

本研究の考察から、①東町は、小路に沿って町家が建ち並ぶ形式から、造成によって通りが整備され、通りに沿って町家が列状に建ち並ぶ形式となり、その小路と通りに囲われた範囲が結果的に街区を形成したこと、また造成の度に敷地を海岸沿いまで確保するため、通りに沿って建つ町家の方が小路に沿って建つ町家よりも奥行が長くなる傾向が認められた。②東町は京都の条坊制におけるみちといえの計画的設定と異なり、京都よりも奥行が長い建物が多く、平安京当初の街区形態と類似した「両側町」を形成していることが示され

図10 東町の生活関連要素の配置

図11 東町の裏路地形成プロセス

た。③東町は防災用の避難路確保のため、街区内に隣家の裏部分を相互に往来できる裏路地と呼べる空間が形成されていた可能性が指摘できる。これは、山・崖と建物裏の間や、海岸線沿いに形成されたもの、更にそれが造成により街区中央に海岸線と並行して形成されたものの3タイプがあり、共同井戸が配置されていることが多いため、避難路としての用途の他、井戸使用のための通路、隣家間交流の場として利用されていたものと推測される。④町内会の範囲は、集落発生が早い地区では小路を挟んで、造成後に形成された地区では通りを挟んで形成されていることが示された。

総じて、宮島門前町東町は、人口増加に伴う海岸埋立てによる宅地造成の繰り返しにより、計画的に列状に拡大し、結果として、街区が形成されており、また、町家が密集する街区での生活・防災機能を、共同井戸や裏路地空間を設け補完してきたまちといえる。

6. 今後の課題

本論では、主に東町の「みち」と「いえ」に着目し、造成による街区形成過程と裏路地・町内会組織等の生活・防災等について示した

が、今後は「みち」や「裏路地」等が、どのような意図や歴史的背景の下で決定づけられ、形成されたのかを明らかにする必要がある。また、本論は東町に限られた考察となっており、西町のまち形成に関する考察を行うことも今後の課題である。

謝辞

本研究に際し、ご協力頂いた岡崎力治氏ほかの宮島の郷土史家の方々、菊川照正氏ほかの宮島の居住者の皆様、前広島工業大学大学院生 佐々木香菜子氏、下瀬瑞貴氏、山口大学教授 中園真人先生に厚く御礼申し上げます。

注釈

- 1) 造成ラインは参考文献 7) 10) 11) や大願寺絵図・吉田家絵図等から推定したもので、図 2 に示す、造成ライン①は 17 世紀末期～18 世紀初期以前、②は 1783 年以前、③は昭和 2～3 年頃に形成されたものと考えられる。
- 2) 通り・小路の平均道幅を付図 1 に示す。また、街区幅は図 7 に示すとおりである

付図 1 通り・小路の平均道幅

- 3) 比較対象は、参考文献 12) を基本資料に、現在の京都府京都市中心部の、かつて平安京が存在した範囲とし、住宅地図の計測を行った。
- 4) 合成結果より、絵図の町家の間口はよく適合している。しかし絵図の町家の奥行は、絵図の表現の違いにより、あまり適合していない。
- 5) 参考文献 7), p.8 の「江戸期には草葺家屋が間隔をとりながら散在する漁村集落を形成したが」という記述、他から判断した。
- 6) 通り A(南側)～通り C(南側)は通りに面し、かつ主開口部を通りに向ける建物を計測対象とした。魚之棚町・桜町は、小路に面しかつ主開口部を小路に向ける建物を計測対象とした。
- 7) 京都の計測対象範囲を付図 2 に示す。東西は新町通り～油小路通り、南北は押小路通り～夷川通りである。これらのみちに面する建物を計測対象とした。

付図 2 京都の計測対象建物

- 8) パターン b が油小路通(東側)・小川通(西側)であり、主に西側南北の 2 街区にみられる。パターン c が釜座通(東側)・新町通(西側)・押小路通(北側)であり、主に東側南北の 2 街区にみられる。パターン a がその他の計測対象建物であり、中央の 4 街区にみられる。
- 9) 本論で考察した裏路地と類似した空間が存在する事例として、福井県大野市の歴史的市街地にある背割水路、大阪市中央区の背割下水等が挙げられる。参考文献 6) 参照。

参考文献

- 1) 池田道人・大場久恵: 厳島門前町の形成と展開 その 2 寺院との関係を中心にして、日本建築学会中国支部研究報告集, 第 10 巻, 1 号, pp.137-140, 1982.10
- 2) 佐々木香菜子・森保洋之: 集落における古民家とその近隣との順応性に関する研究-宮島門前町を対象とした考察-, 日本建築学会住宅系研究論文報告会論文集 5, pp.107-114, 2010.12
- 3) 下瀬瑞貴・森保洋之: 集落の空間構成に関する基礎的研究 その 2. 宮島門前町東町を対象とした考察 日本建築学会大会学術講演梗概集 E-2, pp.61-62, 2011.7
- 4) 花岡拓朗・西山徳明: 広島県宮島町厳島神社門前町における町並み保全に関する研究 その 1: 町並み景観の現状と保全に向けた課題 日本建築学会大会学術講演梗概集 F-1, pp.345-346, 2005.7
- 5) 駒井達也・下瀬瑞貴・森保洋之: 宮島門前町東町の空間構成に関する基礎的研究 その 1. 空間構成の基本的要素と街区形成 日本建築学会中国支部研究報告集, 第 35 巻, 講演番号 0523, 2012.3
- 6) 野嶋慎二・原田陽子: 地方中小都市の場所性と地域継承空間システム 敷地の継承と統合に着目した事例より, 日本建築学会総合論文誌, 第 10 号, pp.39-46, 2012.1
- 7) 廿日市市教育委員会: 厳島神社門前町 廿日市市厳島伝統的建造物群保存対策調査報告書, 2007
- 8) 宮島町: 宮島町史 特論編・建築, 1997
- 9) 広島県教育委員会・宮島町: 厳島民俗資料緊急調査報告書, 1972
- 10) 財団法人日本ナショナルトラスト: 平成 16 年度観光資源保護調査 厳島神社門前町安芸の宮島町並み調査報告書, 2005
- 11) 中電技術コンサルタント株式会社: 世界遺産・厳島 先人に学ぶ防災の知恵, 2007
- 12) 野口徹: 中世京都の町家 東京大学出版会, 1988

[2012 年 6 月 19 日原稿受理 2012 年 8 月 7 日採用決定]